

日本におけるアメリカ文学史（Ⅱ）

— 作品の評価基準をめぐる一考察 —

The History of American Literature in Japan (II)

— A Consideration on Standards for Appraisal of Literary Works —

重 迫 和 美

Kazumi SHIGESAKO

キーワード：米文学史・米文学概論・英米文学講読・比較文学

序

拙稿「日本におけるアメリカ文学史」は、明治時代から今日までの日本におけるアメリカ文学史の編纂方針を、アメリカにおけるアメリカ文学史と、三つの観点から比較検討するものであった。三つの観点とは、(1) 文学史の起源、(2) 執筆体制、(3) 文学作品の評価基準と社会との関係、である。結果として、拙稿は、第三の観点から比較した時に特に顕著である、日米のアメリカ文学史の興味深い違いを二つ指摘した。第一に、文学作品に社会的意義を求める評価基準がキャンノン (canon) 選定に明白に反映されるアメリカのアメリカ文学史に対して、日本のアメリカ文学史家は違和感・反発を示す傾向があること。この傾向は、明治時代から今日に至るまで一貫して見られる。第二に、日本の社会状況が日本のアメリカ文学史におけるキャンノン選定に与える影響は、時代を経る毎に小さくなること。明治の浅野和三郎は帝国主義的ナショナリズムに影響されていた。昭和初期の高垣松雄は日本文壇にも影響を与えていた社会主義運動に無関心ではなかった。ところが、第二次世界大戦後、20世紀末頃までには、日本のアメリカ文学史は、アメリカにおけるアメリカ文学のキャンノン見直しやキャンノン見直しを左右するアメリカの現実社会の変化自体には敏感でありながらも、日本の現実社会との関係には無関心になったと言えるのである。

この違いは何によるものか。もちろん、アメリカ文学史はアメリカにとっては自国のものであり、日本にとっては他国のものであるという大きな違いがある。しかし、文学作品の評価基準と社会の関係に見られる日米の違いを、自国のものか他国のものかという違いだけに還元するべきではない。この違いには、文学作品評価基準自体の日米の違いが関わっているからだ。

本稿では、日本のアメリカ文学史におけるキャンノン選定に関わる作品評価基準について、アメリカの場合と比較しながら、改めて考えたい。その際、シラネ・ハルオが以下で述べる、文学史においてキャンノン (カノン) に選定されたテキストに対する、二つのアプローチを参照する。

[一つ目のアプローチである] テキストのなかに基礎的根拠ないし基本原則を見る基本主義者 (foundationalist) は、カノンに含まれるテキストが、なにかしら普遍的で不変、ないしは絶対的な価値を体現していると考え。[...] 二つ目のアプローチ (こちらが今日一般的なものだが) は反基本主義的なものであり、テキスト自体には基本的根拠などない、カノンに選別されたテキストは、ある時代のある特定のグループないし社会集団の利益・関心を反映したものに他ならない、と考える。(14)

シラネに倣って、キャンノン選定に関わる作品評価基準には、「文学テキストそのものに内在する（とされる）価値」に基づく「基本主義」と、「ある時代のある特定のグループないし社会集団によって、自らの利益・関心に利するようにテキストに与えられた価値」に基づく「反基本主義」の、二極があるとしておこう。

本論では、文学作品評価基準の二つの主義を参照して、第一章で、アメリカのアメリカ文学史におけるキャンノン選定に関する文学作品評価基準について考える。第二章で、日本のアメリカ文学史においてキャンノンとされてきた作品の変遷を概観して特徴を検討し、第三章で、前章の検討を手がかりに、日本のアメリカ文学史におけるキャンノン選定に関する文学作品評価基準について考える。

1 アメリカ文学史における文学作品評価基準

「基本主義」と「反基本主義」の二極から見ると、アメリカのアメリカ文学史は、自ら意識的に、反基本主義を志向していった、と言える。渡辺利雄が、20世紀を代表する三つのアメリカ文学史として挙げている、*The Cambridge History of American Literature* (1917-21)：以下 *CHAL*, *Literary History of the United States* (1946)：以下 *LHUS*, *Columbia Literary History of the United States* (1988)：以下 *CLHUS* の三つを取り上げて、この流れを観察してみよう。

CHAL は、序文で四つの編集方針を挙げている。

(1) It [*CHAL*] is on a larger scale than any of its predecessors which have carried the story from colonial times to the present generation; (2) It is the first history of American literature composed with the collaboration of a numerous body of scholars from every section of the United States and from Canada; (3) It will provide for the first time an extensive bibliography for all periods and subjects treated; (4) It will be a survey of the life of the American people as expressed in their writings rather than a history of *belles-lettres* alone. (iii)

方針 (1) により、*CHAL* は文学史の起源を植民地時代としている。先行する文学史の中には、実用的価値よりも美的価値を重く見て、いわゆる New England の文芸を高く評価し、初期植民地時代の宗教的説教や政治的パンフレットに文学的価値を認めない傾向のものもあった。*CHAL* にはそうした傾向に対抗する意図がある。方針 (4) にも、“*belles-lettres* (文芸)” の美的価値よりも、実用的価値を重く見る傾向が見える。

LHUS にも、同様に、文学の実用的価値を重んじる傾向が見える。以下に序の一部を引こう。

Literature as they have written it, and as the term is used in the title of this book, is any writing in which aesthetic, emotional, or intellectual values are made articulate by excellent expression. [. . .] Literature can be used, and has been magnificently used by Americans, in the service of history, of science, of religion, or of political propaganda. It has no sharp boundaries, though it passes through broad margins from art into instruction or argument. The writing or speech of a culture such as ours which has been so closely bound to the needs of a rapidly growing, democratic nation, moves quickly into the utilitarian, where it informs

without lifting the imagination, or records without attempting to reach the emotions. History as it is written in this book will be a history of literature within the margins of art but crossing them to follow our writers into the actualities of American life. (xxii-xxiii)

LHUS は、文学の価値を “aesthetic, emotional, or intellectual values” としている。また、文学の役割を “in the service of history, of science, of religion, or of political propaganda” とし、“a culture such as ours which has been so closely bound to the needs of a rapidly growing, democratic nation” であるアメリカの文学は、“the utilitarian, where it informs without lifting the imagination, or records without attempting to reach the emotions” であるとする。さらには、“literature within the margins of art but crossing them to follow our writers into the actualities of American life” と述べて、アメリカ文学と現実社会との関係に触れている。

CHAL が第一次世界大戦後に、*LHUS* が第二次世界大戦後に出ていることを考えると、実用性を合衆国文化の特徴として前面に打ち出すのは、伝統的に王侯貴族によって担われてきたヨーロッパの非実用的伝統文化に対して自国の特徴を際立たせることで、多様な民族によって構成されるアメリカ合衆国の国民に一つの文化的特徴があることを印象づけ、合衆国国民に一国の国民としてのアイデンティティを確立するという意味があると言える。実用的価値を持つ作品を高く評価するのは、自国文化を高く評価しようとする意図の表れであり、二度の世界大戦によって、ますます大国化する合衆国を、かつての列強、伝統的ヨーロッパ諸国よりも高く評価したいとする欲望の表れであると言える。ここに、国民国家ナショナリズムの強化に利する作品をキャンノン化しようとする、反基本主義的姿勢があるのは明らかであろう。

CLHUS は、*LHUS* が白人男性中心主義であるとして、そのキャンノンに異を唱えた。その意味では、確かに、*CLHUS* は *LHUS* のキャンノン選定に真っ向から対立しているのだが、そのキャンノン選定方針は、*LHUS* と同じ反基本主義であり、さらに言えば、*LHUS* よりも一層反基本主義を志向しているとさえ言える。以下にあげる序からの引用を検討しよう。

Events such as the Cold War, the war in Vietnam and the protests against it, the civil rights movement, the women's movement, and the struggles of various minority groups to achieve equity in American society have reformed the way many Americans view their nation and thereby their national literature and culture. The very pressures, conflicts, and cultural reevaluations in American political and intellectual life [. . .] generated exciting new critical perspectives and literary expressions that are represented in this book. (xi)

引用は、*CLHUS* 出版の背景に、冷戦、ベトナム戦争や、黒人、女性、マイノリティの人権運動による、国民文学・文化の見直しがあると述べている。本書では、「合衆国文学」の範囲にコロンブスの大陸到達以前や英語以外の言語によるものも含まれることになる。「文学」として何を取り上げるかについて、*CLHUS* は、“the definition of “literature” has expanded to include various forms of expression” (xix) と述べる。拡大された文学の表現形態例として、*CLHUS* が挙げているのは、日記 (diary)、日誌 (journal)、科学的著作、新聞や雑誌の記事、自伝、および映画である。*CLHUS* のいう「文学」が、*CHAL* や *LHUS* では使われていた「すぐれた表現」という

文学の定義に拠らず、様々な表現形態の作品を含むとされていることから、本書においては、いわゆる“*belles-lettres*”の要素を文学の価値として重く見る傾向が *CHAL* や *LHUS* よりも一層低くなっていることがわかる。

LHUS 出版の頃、移民問題や世界大戦を経たアメリカは自国が多民族社会であることを自覚した。*LHUS* では、一国家が多様な文化を内に持つとしても、国家としてはそれらは混じり合い、統一されるべきとする、メルティング・ポットを象徴とした文化多元主義的イデオロギーを背景に、アメリカ合衆国の国家アイデンティティの強化が図られたと言える。一方、*CLHUS* 出版の頃、ベトナム戦争や冷戦期に様々な少数グループによる市民運動を経験したアメリカでは、自らの大義の正当性を疑う声が高まるとともに、自国を構成する多様な要素が、決して一つに融解することはないという認識も強まった。その結果、アメリカは、構成要素の多様性こそがアメリカ合衆国の特徴なのだとする、サラダ・ボウルを象徴とする多文化主義的国家アイデンティティの確立に向かったと言える。*CLHUS* は、既に述べたように、現実社会に連動して政治的・社会的価値の見直しに意識的に取組んでいる分、*LHUS* よりも一層強く反基本主義を志向していると言えるのである。

2 日本のアメリカ文学史におけるキャンノン

では、日本のアメリカ文学史はどうか。日本にとって、「アメリカ文学」は外国のものであるから、日本のアメリカ文学史には、日本の国民国家ナショナリズムに利する反基本主義という定式はただちには当てはまらない。加えて、アメリカのアメリカ文学史に大きな影響を受けていることが当然予想され、一体、日本の特徴などあるのだろうかという疑問さえ浮かんで来る。しかし、丁寧に検討してみると、日本版には、独自の特徴が見えてくる。

代表的な日本のアメリカ文学史、齋藤勇（1941）、大橋健三郎（1975）、渡辺利雄（2007、2010）の文学史について、どの作家がキャンノン化されているかを見てみよう。キャンノンとされる作家には、文学史に取り上げられる他の作家よりも、多くの頁数が割り当てられていると想定できる。そこで、まず、三冊のアメリカ文学史の中で、各作家にあてられている頁数を数え、次に各文学史毎に平均割当頁数を算出し、最後に平均割当頁数を越えて頁数が割り当てられている作家を選び出した。

齋藤では、平均以上の割当頁数は4頁以上であった。上位から、1位 Edgar Allan Poe, 2位 Herman Melville, 3位 Walt Whitman, 4位 Washington Irving, 5位 Ralph Waldo Emerson, Nathaniel Hawthorne, Henry Adams, Eugene O' Neill, 6位 Henry David Thoreau, Mark Twain, Henry James, 7位 John Woolman, James Fenimore Cooper となる。

大橋で取り上げるのは5頁以上で、1位 Twain, 2位 William Faulkner, 3位 Hawthorne, William Dean Howells, James, 4位 Melville, 5位 Whitman, Ernest Hemingway, 6位 John Dos Passos, 7位 Emerson, Thoreau, Theodore Dreiser, F. Scott Fitzgerald, John Steinbeck, 8位 Cooper, Poe, O' Neill, Thomas Wolfe, 9位 William Cullen Bryant, Adams, Stephen Crane, Willa Cather, Sherwood Anderson である。

渡辺の文学史は、全4冊のうち、補遺版（2010）の割当頁が1巻から3巻まで（2007）に比べて多い傾向があるので、補遺版は1巻から3巻までとは分けて平均割当頁を算出した。取り上げるべき割当頁数は、1巻から3巻までは15頁以上、補遺版は23頁以上となる。1巻から3巻までを対象にした結果は、1位 Twain, 2位 Poe, Thoreau, 3位 Hawthorne, 4位 James, 5位 Melville, Whitman, Faulkner, 6位 Edith Wharton, 7位 Benjamin Franklin, Emily Dickinson, 8位 Cooper, Poe, O' Neill, Thomas Wolfe, 9位 Bryant, Adams, Crane,

Cather, Andersonである。補遺版では、1位 Upton Sinclair, T. S. Eliot, 2位 Woolman, James, 3位 Nathanael West, 4位 F. Marion Crawford, Charlotte Perkins Gilman, Pearl S. Buck, 5位 Henry Miller, Dashiell Hammettである。

以上の結果を基に、齋藤、大橋、渡辺の、三者全てにおいて相当の頁割当がある作家を選ぶと、Emerson, Hawthorne, Poe, Thoreau, Melville, Whitman, Twain, James, O' Neillの9人に絞られる。これら9人の作家について、各アメリカ文学史内での割当頁数順位を平均して、総合順位を付けた。結果、総合順位は、1位 Twain, 2位 Hawthorne, Poe, Melville, Whitman, 3位 James, 4位 Thoreau, 5位 Emerson, 6位 O' Neillとなった。

この結果に日本の特徴が見出せるだろうか。ここで、F.O. Matthiessen の *American Renaissance* (1941) を思い出そう。Matthiessen は、同書で、19世紀を代表するアメリカ文学者として Emerson, Thoreau, Hawthorne, Melville, Whitman の5人を論じた。この作家選択を日本のアメリカ文学史におけるキャンノンである9名と照らし合わせると、Matthiessen から外れるのは、Twain, Poe, James, O' Neill の4人である。19世紀アメリカに焦点を絞った同書で、Twain, James, O' Neill の3人が選から外れるのは当然だが、活躍時期から考えて載ってしかるべき Poe は、同書で全く言及されない。実は、渡辺が指摘するように、Poe はアメリカにおいては「文学研究の躓きの石」(『1』331) であり、アメリカでは「歴史的に見て、ポーに対しては彼を「天才」(genius) として高く評価する人たちがいる一方、彼を単なる「山師」(charlatan) であるといって憚らない人たちがいる」(『1』333) ののである。

一方、日本においては、西川正身も「明治以来、アメリカの文人で私たちに影響を与えたのは、ポウ、エマソン、ホイットマン、それくらいでしかなかった」(281) と述懐するように、アメリカ文学が紹介され始めた明治以来、Poe は注目され続けてきた。細入藤太郎の『明治・大正・昭和邦訳アメリカ文学書目』によれば、1887(明治20)年に、アメリカ文学として初めて翻訳されたのは、Poe の“The Murders in the Rue Morgue”(「ルーモルグの人殺し」竹の舎主人訳)と“The Black Cat”(「西洋怪談：黒猫」響庭篁村訳)である。齋藤以前のアメリカ文学史においても、Poe は必ず取り上げられている。例えば、アメリカ文学研究のパイオニアとされる高垣による、日本で最初のアメリカ文学についてのまとまった本と評される、『アメリカ文学』(1927)においても、おそらくは日本で最も古いアメリカ文学史の浅野の『英国文学史：付録 米国文学史 英詩乃種類及韻律法』(1908)においても、Poe は重要作家として扱われている。Matthiessen のいう「アメリカン・ルネサンス」は日本のアメリカ文学研究者に影響を与えはしたが、彼の著書出版以降も、日本における Poe への高い評価は変わらなかった。Poe に対する高い関心が、日本のアメリカ文学史におけるキャンノン選定の日本の特徴の一つだと言って良い。

3 Poe の評価をめぐる考察

日本のアメリカ文学史において、Poe への評価がアメリカでの評価にあまり左右されて来なかったのが事実であるとすれば、ここに日本のアメリカ文学史における作品評価の特徴を見て良いだろう。そこで、先の齋藤、大橋、渡辺に、最初期の浅野も加えて、それぞれのアメリカ文学史の中で、Poe についてどのようなことが述べられているかを検討してみよう。

Poe についての記述を、Poe の「生涯」、「小説」、「詩」、「評論」、「アメリカ性」と、Poe に対する「評価や批評」に分類して、まず予備的な検討を行った。その結果、時代によって評価が変わらない要素と、変わる要素があることがわかった。変わらないのは、Poe 詩作品の、例えば“The Raven”に結実した「美至上主義的技法」で、常に評価が高い。変わるのは、特に小説について言

われている、「ゴシック的な怪奇・恐怖のテーマ」である。この二つの要素の評価に、日本におけるアメリカ文学史のキャンオン選定に関わる作品評価基準の特徴が見えないだろうか。

3 Poe の評価をめぐる考察 ①美至上主義的技法

日本のアメリカ文学史において、Poe の美至上主義的技法には、時代に左右されず、高い評価が与えられている。浅野は Poe の詩の題材が狭いのを不満としながらも、「色と調とを併せたる一種精妙の技術と幽玄の想像」(53) を絶賛し、齋藤は Poe の詩が「極めて微妙な melody をほしいままにし」(91)、「word-music」(91) を持っているとする。大橋は「Poe は何よりもまず、詩人であった。」(73) と述べた後、Poe の詩論を援用して Poe の詩作を「美の韻律的創造」(74) とまとめて「純粹詩 (poésie pure) の先駆者としての栄光ある地位を占めることができた」(75) とする。渡辺は“The Raven”を解説しつつ、「韻律の極限といってよい音楽性を駆使して読者を魅了する」(『1』341) と述べている。このように、作品テーマが現実社会から遊離した Poe の美至上主義的技法に高い評価が与えられることから予測されるのは、作品評価基準が「基本主義的」であることである。この予測は正しいか、それぞれの文学史で確認してみよう。

浅野は、アメリカ文学史を三つに分け、「第一章 植民時代」「第二章 革命時代」「第三章 近代」としている。植民時代で取り上げる文学者は唯一 Franklin で、その理由を彼は、マサチューセッツとヴァージニア植民地の建設について述べた後、「以上は米国植民地の概況なるが、要するに彼等は多忙なる新天地の開拓者にして到底其間に優れたる文学を生み得る筈なし。」(7) と付け加えている。革命時代においては、政治家 Alexander Hamilton、小説家 Charles Brockden Brown、詩人 Philip Freneau しか、浅野は取り上げず、その理由を、「此時代の米国には純文学者として偉大なるはなかりき。」(14) としている。これらのことから、浅野は、先述の CHAL が異を唱えた、美的価値を優先する作品選択を行っていると言えよう。

齋藤の作品評価基準はどうだろうか。その序文から一部を抜粋してみよう。

アメリカにおける文学史研究法は、イギリスに於けるとは趣を異にしている所がある。[……] その特色は世相史的、社会史的研究法である。[……] その判断は、文学としての第一義的価値 (intrinsic value) に対するよりも、当代の人々をいかに反映しているか、又はいかに感動せしめたかという点に重きを置いている。[……] しかし或るイデオロギーの宣伝としての効果如何、又或る科学思想を適用して成功しているか否かが、直に文学としての優劣を決する第一条件であると考え易い弊害を免れない。(5-6)

齋藤は文学作品の社会的意義も評価するが、アメリカではそれに重きが置かれ過ぎている点に警鐘を鳴らす。「文学としての優劣を決する第一条件」は、彼によれば、文学作品の社会的意義ではない。作品に本来備わる (intrinsic) 価値が、すなわち「文学としての第一義的価値」なのである。

大橋は、序で編纂方針について、「文学史における最も重要で、かつ困難な問題は、[……] 個別的な細目、特に個別的な作家、なかんずく作品そのものの解釈説明と、それらを貫いている大きな歴史の流れの記述との関係をどのようにすべきか、ということであろう。」(iii) と述べている。「作品そのもの」と「歴史の流れ」と、どちらを軸にするかというジレンマは、明確な作品選定基準としての意識はないまでも、基本主義をとるか反基本主義をとるか、に重なっていると言える。結局、大橋は、「作品こそが文学の歴史を作り上げる肝心かなめのものであるからには、むしろ作品の解釈説明をこそ主軸とするべきなのだが、同時に他方、作品の解釈説明を並列するだけでは、文学史

は成立しない。ただ歴史の流れを記述する方法は非としても、何らかの形での文学史への試みはなされなければならないのである。」(iii)と述べて、〈作家と作品〉という項と〈概観〉という項を並列させて、両者のバランスをとる方法を選ぶ。1946年にLHUSが出版されて文学評価にますます社会的意義が加味されるようになったアメリカの批評状況に、大橋は配慮してはいるが、引用で「作品が歴史を作る」と述べている点に、個別の作品を自立した芸術として捉えて評価しようとする基本主義的態度が見て取れよう。

渡辺は、序で「現在、アメリカなどでは、あらゆる面で平等主義が優先され、選別、序列化は批判されるようになってきているが、文学者、文学作品には厳然たる優劣の差があり、これを無視しては、文学研究は成立しないと思う。この文学史は、結局、いわゆる「正典」(canon)に焦点を合わせ、アメリカ文学の歴史をたどったものである。「人種、性差、階級」といった硬直化した視点からなされる「政治的に正しい」(politically correct)アメリカ文学研究、見直しは、やはり行き過ぎがあると思う。したがって、本文学史は見直しの見直しの文学史となるだろう。」(『1』5-6)と述べる。自らの文学史を、アメリカ版アメリカ文学史の「見直し」と位置づける彼は、その評価基準を社会性と多様性を重視する現代アメリカ文学史の反基本主義の対極に置く。「「より良き」社会の追求は必ずしもすぐれた文学の必須条件ではない」(『1』14)と彼は述べ、「現代思想における相対主義」(『1』14)に対して「学問研究は究極の絶対的な真理が存在するという前提に立って、その真理を追究するのでなければ、成立しないのではないか。」(『1』14)と続けるのである。

以上のことから、4人の日本のアメリカ文学史家には、共通して文学作品評価の「基本主義的姿勢」があると言える。この姿勢が、日本のアメリカ文学史におけるPoeの美至上主義的技法の時代に左右されない高い評価に影響していると考えて良いだろう。では、彼らの、この基本主義的姿勢は、何に由来するのだろうか。簡単な答えとしては、アメリカ版アメリカ文学史の極端な反基本主義に対する違和感である、と言える。しかし、本稿は、ここで、日本のアメリカ文学史におけるPoe評価のもう一つの特徴、「ゴシック的な怪奇・恐怖のテーマ」に対する評価の変化を手がかりに、日本のアメリカ文学史家の基本主義的姿勢について、もう少し突き詰めて考えてみたい。

3 Poeの評価をめぐる考察 ②ゴシック的な怪奇・恐怖のテーマ

作品評価の変化は、評価基準の変化を意味する。評価基準の変化は、評価基準が反基本主義的であることを意味するのではないか。だとすれば、前節で見た日本のアメリカ文学史家の基本主義的姿勢は何に由来するのだろうか。

ここで参照したいのが日本文学史である。アメリカ文学研究者、西川が「大正の初め、ポウがかなり広く読まれたのは、谷崎潤一郎、佐藤春夫その他唯美主義と関係があるように思われる。」(274)と指摘しているように、同時代の日本文学の状況と日本におけるアメリカ文学の作品評価は、関連していると思えるからである。まず、標準的な高校生用日本文学史の教材『詳説 日本文学史』をひも解き、これまでに見たアメリカ文学史出版年代頃の日本文学の状況を確認しておきたい。

浅野の出版は明治41(1908)年で、日本文学では自然主義から新しい文学潮流が生まれようとしていた時期にあたる。少し前、日本文学は自然主義の前期にあたり、田山花袋の『重右衛門の最後』が明治35(1902)年、島崎藤村の『破壊』が明治39(1906)年に出版されている。日本の自然主義はEmile Zolaの「ゾライズム」に影響されつつ、日本独自に展開した。『詳説 日本文学史』は自然主義の解説箇所、「田山花袋もこの時期『重右衛門の最後』(明治35年)で荒々しい人間の獣性を描き、「露骨なる描写」を主張した」(145)とする。日本文学の自然主義は「露骨なる描写」から、やがて自己の内面の暴露に向かい、後期には「私小説」に変化する。私小説への道を開いた

とされる田山の『蒲団』は明治 40（1907）年の出版。自然主義文学が行き詰まり、新しい文学が胎動してきたのが、『スバル』（明治 42 年）、『白樺』（明治 43 年）、『三田文学』（明治 43 年）、『新思潮』（明治 43 年）が創刊された明治 43（1910）年頃とされる。

齋藤の出版は昭和 16（1941）年である。その直前、大正後期から昭和初年代に、日本の文壇で大きな勢力となるのがプロレタリア文学である。日本のプロレタリア文学は、大学出のマルクス主義者が主導権を握って理論闘争を盛んに行い、大衆と離反して行ったのが特徴とされる。この時代、他を圧倒したプロレタリア文学は、しかし、昭和 8（1933）年 2 月に小林多喜二が特高（特別高等警察）に虐殺され、同年に共産党首脳佐野学と鍋山貞親の獄中からの転向声明が出されると、昭和 9（1934）年にプロレタリア作家同盟（ナルプ）が解散して、急速に運動としての力を失い、文芸復興が叫ばれるようになる。小林秀雄、川端康成などによる『文学界』の創刊が昭和 8 年。やがて島木健作などの転向文学が生まれた後、大政翼賛会が昭和 15（1940）年に設立されてさらに戦時体制が本格化すると、転向作家たちの一部は国策文学へと組み込まれて行く。

大橋は昭和 50（1975）年出版である。第二次世界大戦後、昭和 30 年代半ばから 40 年代後半にかけては、60 年安保、70 年安保、市民運動や学園闘争に代表される激動の政治の季節であった。そのような現実社会の問題に対峙する創作活動が、季刊誌『人間として』で繰り広げられたのが昭和 45（1970）年から 47（1972）年である。『詳説 日本文学史』は「雑誌『人間として』の作家」という項目で、高橋和巳や小田実などの社会派作家を挙げている。高橋の『悲の器』の出版は昭和 37（1962）年、小田の『ガ島』は昭和 48（1973）年である。一方、40 年代半ば頃からは、イデオロギーや政治より、自分たちや自分たちの日常性を見つめ創作する、「内向の世代」が文壇で活躍することになる。早くから活動していた小川国夫（『アポロンの島』昭和 32 年）が代表とされるが、古井由吉（『杏子』昭和 45 年）や黒井千次（『時間』昭和 44 年）が後に続く。昭和 50 年代後半は、1980 年代を読み解くキーワードとして「ポスト・モダニズム」が重宝され、浅田彰などの若手批評家が「ニュー・アカデミズム」の旗手として騒がれた時代でもあることも押さえておこう。

渡辺は『第一巻』から『第三巻』を平成 19（2007）年に出版し、『補遺版』を平成 22（2010）年に出版している。平成初期文学について、『詳説 日本文学史』は「米ソ冷戦終結、湾岸戦争、ソ連邦解体、国内ではバブル景気後退、総選挙による「五五体制」の崩壊、阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件、加えて高齢化社会の到来と、国内外の激変、危機のもとに「文学」自体も大きな変動の時期を迎えている。「純文学」消滅が既に言われ、旧来の「文学」の概念が解体する一方で、新しい型破りな文学が創造されつつあるのが平成初期の現状である。」（190）と、その特徴をまとめている。『日本近代小説史』の著者、安藤宏の表現を借りれば、平成の前、昭和 50 年代後半に、「国家と個人、政治と文学、自我、土俗的な風土など、それまで近代文学が追求してきたテーマが大きく変容するきっかけになったと言われている」（213）村上春樹が登場し、『風の歌を聴け』（昭和 54 年）、『1973 年のピンボール』（昭和 55 年）、『羊をめぐる冒険』（昭和 57 年）を次々に発表した。安藤は村上作品について「「筋合いのない世界」（214）を描き「必然的な因果関係に基づく心理や主義主張に従って人物が動いていく「近代小説」のあり方への一つのアンチテーゼになっている。」（214）と評する。平成文学はこの「アンチテーゼ」が当然視される世界観を背景にしていると言えるだろう。

では次に、浅野、齋藤、大橋、渡辺による Poe 小説のゴシック的要素を取り上げ、日本文学の状況と照らし合わせよう。それぞれの文学史の評価基準の変化、及び、日本のアメリカ文学史家の基本主義的姿勢の由来について、日本文学史と照らし合わせて検討しよう。

浅野が Poe のゴシック的要素を解説する際、自然主義的露骨なる描写のキーワードである「人間

の獣性」という表現を使っている点に注意を促したい。浅野はPoeのゴシック的要素について、“The Black Cat”の「鬼気の迫る」(51)感を絶賛するが、*The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket*に描かれる「極端なる場合」(51)を「人間の獣性をさらけ出さんとしたるもの」(51)と言い、「一種人を引着するの魔力あれど、余は少しくその醜悪なるに閉口す。」(51)と締めくくって、嫌悪感を露にする。

浅野の嫌悪感は、当時の日本文学の主流だった自然主義への彼の嫌悪感を反映している。自然主義は、硯友社的技巧を廃し、社会の現実の直視を訴えて現実暴露を標榜したが、題材が個人の内面に向かった結果、人間の獣性の暴露が中心的テーマになった。浅野のPoe評価は、人間の獣性の暴露、即ち、現実生活の赤裸な暴露を目的とする自然主義に共感できない浅野の文学観を反映する。自然主義の社会の現実直視に反発するという意味で、その作品評価基準は基本主義に接近している。

齋藤の場合、Poeのゴシック的要素の負の側面の原因は、Poeが現実生活を見つめておらず、世俗世界を嘲っているためとされている点に注目したい。齋藤は、Poe作品の弊として、「死んだ美人にとりつかれているような気分」(93)が漂っており、作品の「取材範囲が狭くて単調の嫌がある」(93)と指摘する。この「morbidly及びmonotony」(93)は、齋藤によれば、Poeのゴシック的要素の負の側面である。彼は、その原因を以下のように説明する。

これらの弊即ちmorbidly及びmonotonyは〔詩作品に於けると同様に〕彼の短篇小説に於ても免れない。これは彼自身が*Tales of the Grotesque and Arabesque*という題を選んだことから見ても、おのづから察せられるところである。一体彼は実際生活を見つめて、それを描いたのではない。否、それを世俗の世界として嘲り、或いはそれに触れることを恐れて、目を閉じながら空想に耽った。故に彼の世界は現実の世界とかけ離れている。彼とは対蹠点に立つかの如きScottが少年の時から幾多の騎士の活動を念頭に描いていたとは反対に、彼は死者、亡霊、妖怪等の出没する幻を見ていたであろう。(93)

齋藤は、Poe文学の病的、単調の性質を、Poeが「実際生活」を世俗の世界として嘲って直視せず、空想に耽った結果である、としている。齋藤が、現実生活に世俗性を認め、世俗的要素もふんだんなScottを評価している点にも注目しよう。

昭和10年代の日本文学のキーワードは「生活」(151)である、と安藤は指摘している。当時文壇で叫ばれた文芸復興は、既に急速に勢力を失っていた公式主義的プロレタリア文学に対立する形で起こった。政治的素材主義をうたったプロレタリア文学は勢いを失い、日本文学のテーマは社会改革から私小説的現実生活へと揺れ動いたのである。昭和11(1936)年に正宗白鳥と小林秀雄が繰り広げた「思想と実生活論争」と呼ばれる文学論争のキーワードも「実生活」だった。本論では、その論争の詳細を割愛するが、強調して良いのは、主張の違いはあれ、作品の社会・政治的思想が作家個人の具体的現実生活から生まれるという点では、両者が共通理解を有していることである。

作家個人の世俗的現実生活と作品の関係を作品評価と結びつける齋藤の批評態度は、当時の日本文壇の態度と呼応する。浅野がPoeのゴシック要素に現実生活の暴露を見て取ったのとは異なり、齋藤がそこに現実生活の無視を見るのは、おそらく、日本のプロレタリア文学の、大衆から離れて高踏的になり、極端に政治的価値を優先した態度に、齋藤が共感できないからである。平林初之輔らによる、いわゆる「芸術価値論争」にあるように、当時の日本文学においては、政治的価値には芸術的価値が対立するとされていた。齋藤の作品評価基準は、文学の社会的・政治的価値に重きをおくのを良しとしないという点で、芸術的価値を重んじる基本主義に近づく。

大橋における Poe のゴシック的要素の評価は、部分的に負の側面を強調してきた浅野や齋藤とは異なり、全面的に肯定的である。

自分 [Poe] の扱う恐怖は、Hoffmann らに代表されるようなドイツ的なものではなくて、「魂の恐怖」であると誇らし気に揚言しているように、彼は人間心理の洞窟深くくだって行った。「(自己の赤裸な心を) 書かだけの勇気のあるものは決していない。また、もし書かだけの勇気があったとしても、それを書くことはできない。書こうとすれば、炎のようなペンに触れて、紙はちぢれ、燃え上るだろう。」と書いた Poe は、魂の中にひそむ自分ではどうしようもない悪魔めいたものの存在を知り、恐れていた。恐れていたからこそ、一層洞窟の奥深くをさぐり、そこに見たものを書くという悪魔祓いの儀式を続けねばならなかったのである。[・・・] Poe は Charles Brockden Brown に始まり、Hawthorne, Melville を経て Faulkner にまでいたる、闇の力の探求者たり得たのである。(76)

大橋が Poe のゴシック的要素に、浅野に類した、ともすれば醜い人間の赤裸な生きようを見ている点に注意しよう。その追求を大橋は、浅野がそれに嫌悪感を抱いたのに対して、Faulkner に連なる「闇の力の探求者」と高く評価している。

当時日本文壇の「内向の世代」と呼ばれる作家たちの問題意識が、人間個人の内面に向けられていたのは既に指摘した。大橋の頃、昭和 50 年代には「政治の季節」は終わり、「経済成長に伴う私生活の充足もあって社会は日常の安定を求めて保守化」(安藤 199) していた。その後も日本文学は、社会の現実を真摯に見つめて問題提起する方向へは必ずしも進まなかった。「政治と文学論争」を既を経て文学の政治からの自立が唱えられ、文学の社会的・政治的価値が大幅に切り下げられていた時代、大橋による Poe のゴシック的要素評価には、文学の問題を社会や政治ではなく、個人の内面に求めようとする、当時の日本文学の姿勢への共鳴が明らかに見られる。その評価基準は、個人の内面の問題を重んじて社会的・政治的問題を忌避する結果、基本主義の様相を呈する。

平成の渡辺では、Poe のゴシック的要素は、本来混沌とした雑多な要素からなる真実の一面とされ、否定的に言及される。Poe が自分の「純粋な悲劇」に、あらかじめ作者によって計画された統一された効果しか認めないのに対して、渡辺は、真実には多様な局面があるのであって Poe は十分には真実に迫っていないとするのである。ポスト・モダンを経過した平成の文学の背景には、原理原則に対する不信があり、あらゆる価値には相対的な意味しかないと言われる。渡辺が、作家や批評家などの様々な Poe 解釈に言及して真実の多面性を示そうとする態度は、あらゆる価値が相対的であり、ものの見方の数だけ様々な真理があるとする考えに支えられており、同時代文学の考え方と軌を一にすると行って良い。

作品解釈の多様性の主張は、唯一の真理の否定であり、明らかに反基本主義的である。しかし、実際には、渡辺は著書の冒頭で「絶対的な真理」が存在すると信念を述べていた。Poe のゴシック的要素を取り上げて真実の相対性を論じる渡辺は、自らの信念との間で、どのように折り合いをつけるのだろうか。彼の Poe 評価をもう少し詳しく見てみよう。

すぐれた文学作品の意味、効果はけっして単一ではなく、むしろ「両面価値的」(ambivalent) であつたり、「曖昧」(ambiguous) であつたりする。そのほうがより豊かな作品として高く評価される。ポーが主張する短詩や、短篇小説には、単一の効果によって読者を魅了する秀作も少なくないが、それらは詳細な作品分析の対象とはならず、再読に耐えるとは必ずしもいえ

ない。それに対して、ハーマン・メルヴィルの短篇“Bartleby, the Scrivener”（1853）は、ポーの言うような意味での作者の意図、効果は明確ではなく、曖昧性そのもののような作品であるが、まさにそれ故に、読者の心をとらえつづけているのである。（『1』347-48）

ここには、良い作品は多様な解釈をゆるすのであって、その時作品は、「両面価値」や「曖昧性」という価値を持つとする考えが示されている。解釈の多様性を、渡辺は、「両面価値」や「曖昧性」と呼称し、多様なものが一体渾然となったそれらに、普遍的、絶対的価値を与える。作品の「絶対的な真理」の解明を、真理の解明ではなく、作品が「両面価値」と「曖昧性」を持つことの証明と同義にしてしまっている。渡辺のPoeへの反発は、同時代の、あらゆる価値が相対的であるとする日本文学の状況に反発する態度の表れである。いったんは時代の文学観を認めつつも、最終的に彼は、真理の解明の意味をすり替えることによって、基本主義を志向する。

以上、四つの日本のアメリカ文学史における、Poeのゴシック的要素の評価を日本文学の状況と照らし合わせて考察してきた。Poeのゴシック的要素の評価には、各人の同時代の日本文学への反応が重なっており、浅野には自然主義文学への嫌悪が、齋藤にはプロレタリア文学への反感が、大橋には「内向の世代」への共鳴が、渡辺には相対主義的平成文学への反発が見られる。そして、各人も、一様に、基本主義よりの作品評価基準を志向するのである。

結

本論は、日本のアメリカ文学史におけるキャンオン選定のための作品評価基準を、シラネの言う「基本主義」と「反基本主義」を参照し、アメリカのアメリカ文学史と比較して検討してきた。アメリカのアメリカ文学史のキャンオンは反基本主義的評価基準に拠っていることを本論はまず指摘した。次に、日本のアメリカ文学史には、Poeが常にキャンオンの座に位置する特徴があることを示した。最後に、Poeの作品評価に注目して、日本のアメリカ文学史の作品評価基準を日本文学史を参照して検討し、日本のアメリカ文学史家に基本主義的姿勢が共通して見られることと、それはなぜかを考察した。この考察によって得られた結論は、未だ暫定的な仮説であるとは言え、今後本研究が進むべき方向を示している。そこで、日本文学史の流れを、現実社会との関係においてここで再び確認することで、本研究の展望を示し、本稿の結びとしたい。

おそらくは、どの社会においても、文学史は基本主義と反基本主義の2極の間を揺れ動いてきていると考えられる。文学者は、社会とどのように向き合うか、あるいは向き合わないかを、個々の事情によって選択してきたのだろうが、その個々の事情が時代の影響を免れることはない。大局的な流れを見ると、日本の文学は、現実社会と対峙する、いわゆる社会派とは逆の志向があると思える。道徳性を廃して現実社会のあるがままの姿を映そうとしたZolaに始まる自然主義は、日本では人間性の赤裸な暴露を目的とするようになり、私小説を生むことになった。大正後期から昭和にかけては、日本文学史中、最も積極的に社会に参加したプロレタリア文学があるが、それも体制側の弾圧や内部分裂などの結果、廃れてしまった。戦後起こった政治の季節も、文学を継続的に社会化することはなく、日本文学は内向していく。

ポスト・モダンの時代以降、「文学の地位、文学の影響力が低くなった」（40）と柄谷行人は『近代文学の終り』で述べている。彼は社会的機能という点で、近代文学と現代文学に断絶を看破する。近代は、文学に「哲学や宗教とは異なるが、より認識的であり真に道徳的である可能性が見出され」（45）た希有な時代だった。彼によれば、認識的、道徳的である「近代文学は1980年代に終わった」（39）。彼が「1999年の末に、それ[文学とのつきあい]を全部やめた」（『柄谷行人政治を語る』

162) のは、彼が文学に、倫理的であること・政治的であること、つまり、社会的機能をもはや期待していないからである。

以上のように、日本文学の流れを概観してみると、日本のアメリカ文学史のキャノン選定に見える基本主義的評価志向は、日本文学にある根強い基本主義的評価志向に影響された結果であると考えられよう。近代文学の終焉を経た現在において、今後、日本のアメリカ文学史がアメリカにおけるように反基本主義的評価基準にシフトするとは考えにくい。マイノリティーの多様性ゆえに絶えず国民のイメージの見直しを迫られるアメリカにおいては、文学は、おそらく、今後も社会的機能を固持し続け、文学史は反基本主義的であり続けるだろうが、日本でその可能性は低いからだ。もちろん、ここで私が述べたことは、一つの仮説に過ぎない。日本のアメリカ文学史キャノン選定のしくみを明らかにするには、さらに、日本文学を社会との関係において緻密に検討した上で、日本文学と日本社会のアメリカ文学史への影響をさらに分析していく必要があるだろう。

引用文献

浅野和二郎『英国文学史：付録 米国文学史 英詩乃種類及韻律法』大日本図書，1908年。

安藤宏『日本近代小説史』中央公論新社，2015年。

大橋健三郎，斎藤光，大橋吉之輔 編『総説アメリカ文学史』研究社，1975年。

柄谷行人『終焉をめぐる』福武書店，1990年。

_____『近代文学の終り』インスクリプト，2005年。

齋藤勇『アメリカ文学史』研究社，1941年。

重迫和美「日本におけるアメリカ文学史」『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』第一巻，2015年（187-198頁）。

シラネ，ハルオ，鈴木登美 編『創造された古典：カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社，1999年。

高垣松雄『アメリカ文学』研究社，1927年。

濱川勝彦，大槻修『詳説 日本文学史』数研出版，1998年。

西川正身『アメリカ文学覚え書』研究社，1959年。

細入藤太郎監修『明治・大正・昭和 邦訳アメリカ文学書目』原書房，1968年。

渡辺利雄『講義アメリカ文学史：東京大学文学部英文科講義録』（全3巻）研究社，2007年。

_____『講義アメリカ文学史』（補遺版）研究社，2010年。

Elliott, Emory, et al. eds. *Columbia Literary History of the United States*. New York: Columbia UP, 1988.

Spiller, Robert E. et al. eds. *Literary History of the United States*. 1946. Rev. 4th ed. New York: Macmillan Publishing, 1974.

Trent, William Peterfield, et al. eds. *The Cambridge History of American Literature*. 3 vols. New York: G. P. Putnam's Sons, 1917-21.